

市民協働推進コーディネーター活動報告書

2023/04-2024/03

2024(令和6)年3月
京都市総合企画局
総合政策室市民協働推進担当
コーディネーター:牧野杏里

広く市民の皆様から、京都がもっとよくなる、もっと住みやすくなる、まちづくりの取組提案を募集中！

[「まちづくり・お宝バンク」提案一覧](#)

》表彰制度を活かしながら活動を広げています！

取組例

01

福祉ハンド&ネイルケアで、

みんなが笑顔で暮らせるまちにしたい！

高齢者福祉

ボランティア

取組
表彰

ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチーの松本さんは、高齢者福祉に貢献したいという思いから、京都で高齢者施設や福祉施設等に訪問しハンドトリートメントやネイルケアなどを行うボランティア活動を始めました。活動を立ち上げたばかりの頃、京都市内でのつながりを求める中で『まちづくり・お宝バンク』に取組提案をしていただきました。

お宝 No.425 福祉ネイリストらによる訪問ハンド&ネイルケア

▼連携や出展機会を増やす

活動の理念や内容が明快で共感性が高い一方、活動実績がまだそれほど多くなかったので、初めは「まちづくりお宝バンク」提案者との連携や、市民協働が連携するイベントへの出展などを通じて、実績や活動ノウハウを高めていきました。



▼活動初期から助成制度に応募

ガンチーさんの特徴的な点はその行動力。活動の初動期から様々な民間企業の助成制度を活用。申請書類の作成は1件でも大変な作業ですが、「ボランティアをするために平日は働く」という覚悟を持って活動されており、無償で行うボランティアへのこだわりも強く、積極的に応募する姿が印象的でした。推薦者を必要とする募集も多く、市民協働では財団等へ趣旨を確認したり、推薦者や推薦文などの形でお手伝いさせていただきました。



▼警察や消防との連携で啓発活動

そして警察や消防など、啓発活動を行う組織との連携では、「詐欺注意」などの特に高齢者へ向けたメッセージをあしらったネイルシールをつくり、啓発活動に協力。積極的に「貼ってほしい」と要望が出るくらい大好評。

健康長寿のまち・京都いきいきアワード 2022 大賞

京の公共人材大賞 審査員特別賞



▼助成を受けている組織のPR

助成金採択団体として、活動時に着用するエプロンに、助成を受けている組織名の刺繡ワッペンを付けています。ガンチーの松本さんがサッカーに造詣があり、プロサッカーユニフォームから着想を得たとのこと。“お互いにWINWIN”となるとともに、「こういう財団や企業から支援される団体なんだ」という信頼感にもつながりそうです。

取組の思いや明確さに加え、成果が見えやすく、連携依頼も増えて、さらなる実績が生まれる。そしてだんだんと受賞機会が増えていきました。受賞実績は、単に活動が評価されただけではなく、それだけ共感性が高く、社会的意義がある取組であることが、他者により伝わりやすくなります。人材の確保など、まだ課題はあります BUT 関心を持つ人が増えることで徐々に解消されていくのではないかと感じます。

▼今回の試みのポイント: 活動初期でも、助成金や表彰制度が活動の推進力になることもある

一般的には活動歴や実績があって応募できるもの、という印象（実際にそういう条件のものも多い）ですが、ガンチーさんの活動展開を見ていると、活動の軸が明確かつ共感度の高い内容だと、初動期でも採択のチャンスがあると感じます。そして、それを本来の活動の充実に充てつつ、ただ支援を受けるだけでなく、感謝を込めて積極的に発信することで次の応募につながる好循環が生まれており、この事例は活動初動期の団体の方にも参考になると思います。

認知症になっても、地域でなじみの関係が継続できる地域をつくりたい！

取組
表彰

『まちづくり・お宝バンク』でコロナ禍の取組提案を重点的に募集していたところ、屋外での農業活動を提案してくださった岩倉地域包括支援センター。活動内容を試行錯誤しながら、「認知症の方“に”何ができるか」ではなく、「認知症の方“と”、何ができるか」を常に考えていました。

お宝 No.460 認知症になっても、地域でなじみの関係が継続できる地域づくりに挑戦

お宝 No.366 いわくら農園俱楽部プロジェクト

▼農作業からはじまり、 どんどん活動が広がる

コロナ禍でも安全に利用者が交流できる場としてスタートしたいいわくら農園俱楽部も、地域の農業経験者の力を借りて、利用する畑も数が増え、生産量も増えるなど、どんどん活動が拡がり、浸透しています。



▼チーム FC いわくらとして活動が進化

最初は農作業の延長で、「苗を育てたり座れる台が欲しい」というところから始まった木工作業。「男たちの作業工房」と名付けられた活動は、利用者の男性の方々の活動として定着しました。そして「次は椅子が欲しい」「パソコンのモニターラックもつくれるのでは」と、自然と依頼や作りたいものが出てきて、「誰かの役に立つなら」と皆さん一生懸命作っている様子が印象的です。

さらには、利用者の娘さんが染色をされることから、染めのワークショップが行われたり、いらなくなった消防ホースを使って鉢カバーをつくり、ステンシルをほどこしたり。アイデアは尽きないようです。利用者の方々が、童心にかえったように嬉々として作業されている表情を見ると、ものを作ることがもたらす効果を感じます。



▼「認知症とともに生きるまち大賞」本賞受賞

こうした活動が評価され、2023年度は、社会福祉法人NHK厚生文化事業団による、第7回「認知症とともに生きるまち大賞」本賞受賞。評価を励みにしつつ、これまでの自然体なスタイルで活動を続けられています。



▼今回の試みのポイント：活動アイデアはその場の発想を大切に、楽しみながら、他者を受け入れ広げていく

チーム FC いわくらの活動は、いつも笑顔で明るく皆が楽しんでいる様子が印象的です。その要因は、活動最中の会話の中で生まれた「こんなことしようか」というその場の発想を大切にしている事ではないかと思います。その結果活動は有機的に生き生きと広がり、その自然体な活動が「受賞」という形で評価されて、それもまた現場の皆さんの喜びや活気につながっていると感じます。

そして、私も時々参加させていただいていますが、初めての方でも、目の前の作業を通じて疎外感なくその場にいる方達と自然と交流できる雰囲気があり、そのことも「また行きたい」と思える魅力となっていると思います。

□お宝バンクの取組提案に興味をもたれた地域の方、事業者の方、関連部署の方

□行政や事業者の方とのつながりを模索中の市民の方、連携の可能性と一緒に考えます。お気軽にご連絡下さい！